

たかやま共創ミーティング第4弾 1回目まとめ

テーマ：地域の宝である子どもたちに期待すること

日 時：令和6年7月16日（月）19：00～20：15

場 所：高山市役所 4階 中会議室

参加者：市民 4名（公募） ※1名欠席

市 学校教育課長、協働推進課長、こども政策課長

- 内 容：1 自己紹介
2 現状や課題等の出し合い
3 意見の整理

発言者	内容
市民①	○人口は少ないがいろいろな人がいて面白い。観光客も含めて外国人も多く面白いまち。IターンやUターンで帰ってくる人もいる。 ○高山市は、チャンスがたくさんあるまち。可能性があるまち。外国人もたくさんいるし、留学する必要がなく外国語が学べるまち。これからの世の中を考えると英語が必要となってくる。 ○高山市での進学について、全日制の高校でなくてもよいと考える。通信制の高校で十分であると思っている。日中は、観光客と関われるアルバイトをしながら英語等を学べる。 ○高山市は思春期が迷子である。小・中学校までは手厚く指導・支援していただけるが、特に高校生の居場所がない。村半はよい場所であるが、ルールもあり基本的には静かに過ごす場所であるから、みんなが自由に集まれて騒げるような場所があるとよい（大政をそういった居場所に…）。 ○多様性の時代にあるので、個性を大切にしていきたい。 ○高山市は人口も少なく家の数も少ないため、隣の家との距離がある。そのため、不登校になると家に引きこもる可能性も出てくる。だからこそ、引きこもりをつくらないためにも外で集まれる場所があるとよい。 ○高学年から高校生くらいまでを受け止めてくれる場所があるとよい。 ○学校という枠を超えて関われる場所がよい。 ○高山市の子どもは恋をしない。恋も含めいろいろな経験をしてほしい。
市民②	○引きこもりがちになるのはよくない。そういった子どもたちの受け皿がない

	のであればあるとよい。図書館などはその居場所にはならないか。同じ悩みを抱える子ども同士が互いに話せるような場所があるとよい。
市民①	○高校生になるかも含めて中学卒業後からが不安が多い。そういった保護者の声をよく聞く。自主性のない子どもが多くなっていることも心配。
市民③	○高校の部活動のサポートをしているが、生徒たちは非常に素直で優秀である。 ○言われたことしかできないという心配もある。次の段階へと進んでいきたいが、今の子どもたちはできない。そして夢をもっていない子が多い。高校生の様子を見ていると、安全策で無難に生きているように見受けられる。 ○高校生は忙しすぎる。学業だけでなく資格をとらなければならないとか…
市民④	○小・中の格差を感じる。小学校に行ったときに「名刺ください。」と言われた。能登へのお手紙を書く際に、先生の言われた通りにタブレットを使ってまとめて発表するだけ。つまり、学校の先生の力量によって決まる。学校の方針が大切になってくる。 ○地域お仕事発見隊の取組みで、110社において体験ができる。選択肢を与えどれだけ体験することができるかが大切。中学生までが勝負だと考える。 ○中学生までが大切であるが、子ども任せで自主性が養えるのか。自主性…自分で考えて自分から行動することは非常に大切である。そんな力をつけていきたい。
市民①	○学校によって決まりごとが多すぎるのではないか。靴の色のルールなど。もっと、感性の柔らかいうちに多くの選択肢を与えることが大切ではないか。
学校教育課長	(学校教育課長より資料の提示) ○高山市は、日本で住みよい町48位。1741市町村(岐阜県は42)あるなかで、魅力的なまちであると言える。つけたい資質・能力からも英語力を身につけることは大切である。これから未来は日本だけで生活できなくなっていく可能性もある。そこで、テーマを「探究心」「自主性」としたい。
市民③	○人口減少の時代。人と同じことをやっていくと貧乏になる。昔とは違って、今までの知識や学力は役に立たない。反対に人と違うことをやると儲かる時代になってきている。一人一人が起業できるくらいに成長しなければならないと考える。 ○知覚と感性が身につけられるかが大切な時代にきている。 ○企業の寿命は25年以下という統計が出ている。平均23年くらい。これからの人間の寿命を、107歳と考えると20歳を引いて87年間で、仕事を3～4回転職するサイクルで生きていかなければならない時代。

市民①	○子どもたちの64%は、今存在しない職業に就くと考えられている。自分で決めないと幸せにはなれない。自己決定が大切である。 ○療育というものがあるがご存じか。日本の学校は自己決定させてもらえない。小さい頃からやっているがなかなかできないのが現状。子どもたちの返答は、「どっちでもいいよ。」が多いように感じる。 ○みんな同じ帽子でないとだめなのか。自由でよいと思う。わが子は、全く違う帽子を着用していったが、学校はよいと言ってくれた。 ○経済的な不安、集団的な問題など、さまざまなものについて検討が必要。
市民①	○教員になる人は、さまざまな人がいてよいと思う。例えば、一般企業に就職して働いて、40歳から初めて教員になってもよいのではないか。
市民④	○野球の指導は今でのトップダウンでやっているか。
市民②	○現在は、ガイドラインも作成されており、全体的にそういった指導体制ではない。審判の立場からもそのような指導が見受けられる場合は、指導を行うようにしている。
学校教育課長	○平成29年に部活動のガイドラインができています。今は、部活動に加え地域移行にむけて地域クラブも増えてきているが、研修も行いそのような指導がないようにしている。
市民③	○昔は、トップダウンでやっていたが、これではだめだと気づいた。自分自身は変えてきたが、今でもその名残があるように感じる。
市民②	○人間の根本を育てることを考えると、体罰や行き過ぎた指導はだめであるが、少しは厳しいこともあってもよいと思う。何でもだめではない。すべてがハラスメントではないし、敏感になりすぎるのはよくない。また、個人的に攻撃するのもよくない。感情的に怒るのもだめだと思う。
市民①	○怒るのではなく、「叱る」ようにすればよいと聞いた。使う言葉を大切にしてい時には叱ることも必要である。
市民②	○先ほどのこともそうであるが、先生方は本当に大変な時代だと思う。
市民①	○助成金をいただいて「おやおやの会」というものを立ち上げている。私たちもICTの研修を行っている。現場の先生方は、ICTスキルが乏しいので、しっかりと学んで身につけて楽しくやってほしい。
市民④	○子どもたちは、大学で学んだことを高山市では生かせない。高山市の企業に

	は、ＩＣＴに強い子がほしい。そのためには、企業の受け皿も必要。受け入れるだけの土台を築いてほしい。 ○高山市は大学で学んだ子どもを受け入れるために努力すべき。市が子どもたちに投資しているのだから回収してほしい。 ○居場所や探究心というテーマであるが、子どもがどんな大人に出会うかが重要であると思う。また、成人するまでに地域の方々とどれだけ出会えるかも重要である。
市民①	○高山市は多様な大人に出会えるまちである。面白い人がたくさんいる。しかし、恋ができるまちではない。高山市ではそういった場所がなく、パートナーを見つけづらい。 ○高山市にもそんな出会いがたくさんできて、恋ができるような場所があるとよい。他県にはたくさんある。
市民①	○学校はもっと自由になるべき。楽しい学校でありたい。わが子は８年間療育でお世話になってきたが、今は特別支援学級に在籍しているが、個性的に自由に楽しく生きてきている。
市民③	○昔はアルバイトに、今は転職の時代と世の中は変わってきている。誰と関わるかが重要になってくるので、先生方が変わることも必要である。
市民①	○日本の先生は大変。１学級３０人は多過ぎる。特別支援学級の８人も多過ぎると思う。これは日本全体の問題である。ちまたでは、子どもも保護者もこんなことを言っているが知っているか。「先生ガチャ」みんなが口々に言っている。先生を選べない。誰が当たるか分からない。そのくらいのことである。
市民④	○防災の点から、学校としても助ける側として学びたい。能登地震を受けて小学校で取り組みを行った時に、防災士を呼んでうまくはまったが、防災の観点から、自分の身を守る、人の助けになれるかといったことが大切であり、ぜひ学んでいきたい。
市民①	○自分自身が大学生の時に阪神大震災で被災した。いつもやっている訓練はまったくもって意味がなかった。感じたことは、日頃からのつながりがたいせつであるということ。既存も大切であるが、新しいことに取り組んでいくことも大切である。